



CQM(超短期経済予測モデル)

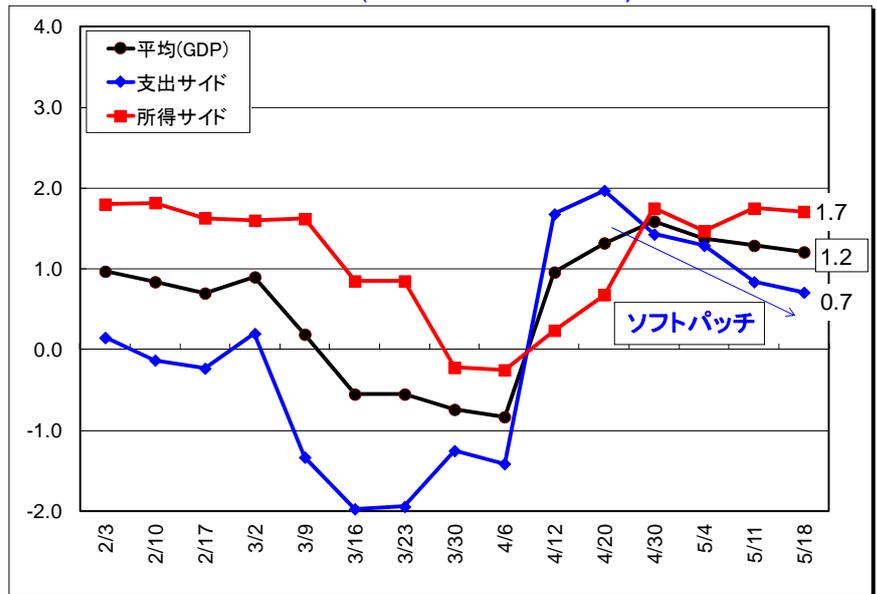
熊坂侑三 (APIR リサーチリーダー, ITエコノミーCEO)
内容に関するお問い合わせは下記まで
e-mail:kumasaka@iteconomy.com

米国経済(週次)予測(2012年5月18日)

ポイント

- ▶今週更新された月次経済指標は支出・所得サイドの実質 GDP にそれぞれプラス、マイナスの影響を与えた。
- ▶支出サイドから予測される実質 GDP 予測は過去5週間下降トレンドを形成し、経済成長率は1%を下回るまでになった(グラフ)。
- ▶しかし、所得サイドからの実質 GDP、実質最終需要などのその他のアグリゲート指標が2%程度の成長率を示しており、支出サイドからの実質 GDP のスローダウンが一時的なもの、すなわち”ソフトパッチ”になる可能性が高い。
- ▶4月24日-25日のFOMCミーティングの議事録を見る限り、連銀エコノミストは欧州の財政・金融危機と米国の”Fiscal Cliff”のダウンサイドリスクに注目しており、当分金融スタンスの変更はない。

CQM 予測の動態：実質 GDP 成長率
2012Q2 (%、前期比年率換算)



<ダウンサイドリスクに注目する連銀エコノミスト>

5月18日のCQM予測は3月の企業在庫(小売業在庫)、4月の消費者物価(CPI)、小売販売、鉱工業生産指数、住宅着工件数を更新した。グラフに見るように、支出サイドから予測される実質 GDP 伸び率は過去5週間下降トレンドを形成し、その伸び率が1%を下回るようになった。一方、所得サイドから予測される実質 GDP 伸び率は下降する様子は示さず2%弱の成長率を示している。小売販売が1月-3月と月平均0.8%と大幅に上昇し、4月には0.1%増と急速にスローダウンしたのはやはり暖冬の反動の影響と見られる。この暖冬の反動がGDPの支出サイドの項目に与える影響が大きいことから、米景気のスローダウンの感覚が強くなっている。しかし、所得サイドからの実質 GDP、実質最終需要などのアグリゲート指標が2%程度の伸び率を示していることから、支出サイドからの景気のスローダウンは一時的な”ソフトパッチ”となる可能性が高い。

4月24日-25日のFOMCミーティングの議事録が5月16日に発表され、連銀エコノミストの景気への見方が分かる。彼らは依然として実体経済に関して、”Economic activity is expanding moderately”といつもの曖昧な表現を使っている。インフレに関してはCQMが2%~2.5%のヘッドランインフレ率(2012年第2四半期)を予測している一方、”Overall consumer price inflation increased somewhat”と幾分のインフレ上昇は認めるものの、連銀のインフレ目標の2%を超えているとは言わない。17人の連銀エコノミストのうち、構造的失業を指摘するのは2人しかいない。連銀エコノミストの景気への関心はダウンサイドリスクにある。すなわち、欧州の財政・金融危機の悪化、また議会が財政赤字に長期的な解決策を見出せない時の急激な財政からの引き締めである。これをバーナンキ連銀議長が最近”Fiscal Cliff”の可能性と言う言葉で表している。すなわち、今のほとんどの連銀エコノミストには出口戦略など考えることさえないのである。

- ・本レポートは執筆者が情報提供を目的として作成したものであり、当研究所の見解を示すものではありません。
- ・当研究所は、本レポートの正確性、完全性を保証するものではありません。また、本レポートの無断転載を禁じます。
- ・お問い合わせ先：一般財団法人アジア太平洋研究所 contact@apir.or.jp 06-6441-0550